

高杉良

社長 の器



しやちよう うつわ
社長の器

たかすぎ りよう
高杉 良

© Ryo Takasugi 1992

1992年2月15日第1刷発行

1993年2月19日第6刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——信毎書籍印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。

(庫)

ISBN4-06-184986-7

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

社長の器

高杉 良

目次

第一章	社長急逝	6
第二章	学生重役	50
第三章	同族会社	89
第四章	高度成長	113
第五章	議員誕生	157
第六章	合同葬儀	203
第七章	労働貴族	227
第八章	内容証明	276
第九章	民事訴訟	304
第十章	一陽来復	328

解説

佐高 信

349

単行本『闘う経営者』（一九八八年 小社刊）を改題

社長の器

第一章 社長急逝

1

夜八時過ぎに玄関のインターホンが鳴った。

「先生ただいまお帰りになりました」

いくらかしゃがれ気味な林の声である。

林^{さとし}聡は、高原^{たかはら}高望^{たかもち}が代議士に当選する以前から専用運転手を務めていた。四十四、五歳の実直な男である。

正子^{まさこ}は、厨房^{ちゅうぼう}で食事の仕度をしていたが、ガスレンジの火を消して、玄関へ飛んで行った。正子が出迎えなければ、高望は絶対に靴を脱ごうとしないのである。

しかも笑顔を忘れてはならなかった。

「お帰りなさい」

「うん」

いつもなら笑顔を返してくるのに、今夜は不機嫌そうに短く答えただけだった。

高望は、靴を脱ぐときに少しよろけ、背後から林に支えられた。

「あなた！」

正子があわてて手を貸そうとすると、高望は手を振った。

「大丈夫だ」

「奥さま、先生はひどくお疲れのご様子です。議員団総会を中座したほどですから」
林が小声で正子に告げた。

高望は、朝から元気がなかった。健啖家^{けんたんか}で時間をかけて朝食を摂^とらなければ気が済まないほうだが、大根の味噌汁を一杯飲んだきりで、ほとんど食べ残してしまったのだ。

「どうしても登院しなければいけませんか」

「うん。きょうは開会式だからな。天皇陛下がご臨席くださるのに、休むわけにはいかんじゃないか」

「それでしたら、もう少し食べなければ……」

「昼にうな重を食べて、取り返すさ」

食卓でのそんなやりとりを思い出して、正子は林に訊いた。

「お昼はどうでした」

「秘書のかたちと『伊豆栄』でうな重をめしあげりましたが、先生はほとんど……」

「林君、心配しなくていいぞ。ちょっと疲れてるだけだ」

高望にさえぎられて、林は口をつぐんだが、心配でならないと言いたげに正子に眼で訴えてい

る。

この日、高望は朝九時過ぎに登院し、九時二十分から行なわれた国会対策委員会に出席、十一時からの国会開会式、正午からの議員運営委員会、一時からの本会議、二時四十分からの公職選挙法対策特別委員会、四時からの同理事会と院内におけるすべてのスケジュールを消化したあとで、夕方五時から紀尾井町きおいちょうの海運倶楽部で開催された社民党の議員団総会に出席した。

前日の一月二十五日は日曜日だったが、三つの後援会の賀詞交換会に顔を出し、鎌倉扇かまくらあふぎが谷の自邸に帰ったのは深夜だった。

五十歳の若さにものをいわせて、年末年始の挨拶回りを精力的にこなし、元旦の宮内庁主催の新年祝賀の儀ぎに出席して以来、家にじっとしていた日は一日とてなかったが、二十七日、二十八日の両日は正子の意見を素直に受け容れ、高望は休養を取った。

こんなことはついぞなかったことである。

もっとも、家でじっとしてられる高望ではなかった。

高望は、自動車部品メーカー、啓発社製作所の代表取締役社長でもあったが、会社関係の書類を読むだけでも二日ぐらいいは退屈することはないし、久しぶりにピアノに向かう時間ももてた。

一階のリビングルームにグラランドピアノが置いてあるが、妻の正子も娘の佳子けいこもたしなむ程度なのに、高望のそれは二人に一目も二目も置かせるものであった。

身長一メートル五十九センチ、体重七十五キロの体型とピアノのイメージは重なりにくいが「パパのおもちゃ」と子供たちにからかわれながらも、高望にとってピアノの前は、休息の場所

でもあったから、つとめて弾くようにしていた。

丸一日完全休養したお陰で高望は、二日目は軀からだの気たるさが取れ、ピアノに向かう気になり、昼食後、妻に「トセリのセレナーデ」を聴かせた。

弾き終わって、ソファの正子から盛大な拍手を浴びて、高望はまんざらでもなさそうだった。

「まあまああっていうところか。一カ所間違えたが、気がついた？」

「いいえ。素晴らしかったわ」

「ママ、代らないか」

高望はピアノを離れ、正子に並びかけた。

「佳けい的てきのやつ、英会話にとりつかれちゃってぜんぜん弾いてないようだなあ」

佳けい的てきとは佳子のことだ。佳子は二年前に日本女子大の英文科を卒業した。在学中に英検一級の資格を取得したが、それにあきたらず同時通訳を目指して、英語学校に通学している。

高原家は四人家族で、長男の望のぞむは慶応大学経済学部のぞむの二年生だ。

「佳子は、パパに似て負けず嫌いで勉強が好きなんです」

「男の子に生まれてくればよかったね。頭のいいのはママに似たんだろう」

「昔からわたしの頭は空っぽですよ」

「佳的にボーイフレンドはおらんのかね。僕が元気なうちに結婚してもらいたいなあ。養子を取ることまでは要求しないが、結婚してからもこの家に一緒に住んでもらえるとありがたいんだが……」

「当分お見合いするつもりもないようですよ。三十まで働くなんて言ってますから」

「なんだって！ 冗談じゃないぞ。親をおどかすとは太いやつだ」

高望は真顔でつぶけた。

「佳的には強制的に見合いさせるぞ。僕が相手を見つけてくる。あいつ、もう二十四だろう。二十四と言えば僕たちが結婚した齡じゃないか」

「そうでしたね……」

正子が遠くを見る眼をみせて、つぶけた。

「赤羽のお母さんが五十のときです。わたしたちがちょうど五十ですから、いま佳子に結婚されたら、親としてはちょっと複雑な気持ちになるんじゃないですか」

「どういう意味だ、と問いたげに、高望が軀をはすかいにして、正子を見つめた。

「お嬢さんに娘を奪られてしまったような心境になるんじゃないかしら。お母さんの気持ちがかかるような気がします。あなたは、赤羽の新婚時代も必ず嫁のわたしを応援してくれましたね。お母さんとわたしの間に入って、おろおろするなんてことは一度もなかったわ。『われわれ夫婦のことに立ち入らないでくれ』って、ぴしゃりとやってらしたでしょう。お母さんに見てみたら、悔しくて、嫁を恨むことになりますよ」

なんでこんな話になってしまったのだろう、と思いながら、正子は煎茶をすすった。

「おふくろは、底意地の悪いところがあるんだ。あの性格は、わが母ながら、たまらなかったな。母は、僕が兄貴より先に結婚したのがまず気に入らなかった。それから、親父の女を僕が真

っ先に認めて、いろいろ援助したことも腹立たしくてしょうがなかったんだ。僕に言わせれば、親父が女をつくるのは、仕方がないんだな。母は親父に対して、やさしさがなさ過ぎたもの」

「……………」

「おふくろ、兄貴とは、とうとう分かり合えなかったね。僕なりに努力したつもりなんだが、僕が代議士になったことで、決定的になったな。おふくろは昔から兄貴びいきでねえ。僕が兄貴より上になることは絶対にゆるせないんだろうな。ま、あっちは大企業の社長だから、野党の陣笠代議士なんて目じゃないと思ひ込もうとしているに違いないが……。それにしても、兄貴は僕が三回も連続当選するとは思わなかったろうな」

「お母さん、お兄さんとあなたの関係がそのまま修復されずに終ってしまふなんて、寂しいですね」

「僕は、その気はまったくくないよ。おふくろとか兄貴とか思わないことにしている。住む世界が違うと言い換えてもいい……」

高望は、正子のほうへ身を寄せた。

「僕にはママがいるからね。ママは、おふくろ兼女房みたいなものだ。ずいぶん甘えさせてもらったな。これからも甘えさせてもらうが、この世の中に僕ほど幸福な男はいないと思ってるよ」

高望は、正子の手をもてあそびながら話をつづけた。

「おふくろと兄貴のことでは、ママにつらい思いをさせたが、ママだって不仕合せってことはないだろう。僕は、ママに誇れることが一つだけあるんだ。それがなんであるかわかるかい」

正子はかすかに首をかしげて考える顔になった。

「わからんかなあ。あのねえ、僕は、ママ以外に女性を愛したことはない。そういうチャンスがなかったこともたしかだが、たとえ据え膳のようなことがあったとしても食わなかったと思うな。それほどママは素晴らしい女だってことだよ。親父や兄貴みたいな真似はしたくないっていうか、それを反面教師にしてきたってことも多少はあるけれど、ママがよすぎたんだ」

「ぎょうのパパはなんだか少しおかしいわ。どうしたのかしら……」

正子は、いくら相手が夫でも面映おもはゆかった。

「嘘だと思ってるのかい。僕がママ以外の女を知らないってことを……」

高望に顔を覗き込まれて、正子は微笑した。

「信じてますよ」

「それならいいんだ。ママとたまにはこんな話をするのも悪くないね」

高望はにっこり微笑み返した。いい笑顔だった。

2

あくる日、高望は信濃町しなのまちの慶応病院に入院した。

「人間ドックへ入ったつもりでオーバーホールしたらどうですか」

「国会の予算委員会で党を代表して総括質問することになってるから、入院は無理だよ」

「それでしたらなおさら好都合じゃありませんか。病院から国会へ通えばいいでしょう。そのほうが近くていいわ」

「そうだなあ」

前夜、食事のときに、正子が入院を提案したのは、高望が食欲を示さなかったからだ、それをあっさり受けたのは、よほど躰が参っているからに相違ないと、正子は気を回した。

高望は、友人の阿川教授に自ら連絡を取って、内科病棟に個室を用意してもらった。十時に入院し、直ちに阿川教授の診察を受けた。

阿川は、診察後、正子を廊下に誘い出した。

「ちよつと長びくかも知れませんが」

「そんなに悪いんでしょうか」

「いろいろ検査してみないと詳しいことはわかりませんが、肝臓が悪いようです」

「なんですか、予算委員会で質問するとか申してましたが……」

「ちよつと無理でしょうねえ」

阿川は眉をひそめて、手を振った。

正子は不安になった。

「こんなになるまで、よく我慢できたと思うなあ。お腹が張ると言ってましたが、腹水によるものです。利尿剤もいいのがありますし、ま、できるだけのこととはしますよ」

「くれぐれもよろしく願います」

「奥さんもお忙しいでしょうから看護婦をつけたほうがよろしいと思います」

正子が胸をどきどきさせながら病室に戻ると、ベッドから高望が笑いかけてきた。

「ママ、僕は本物の病人にされちゃったのか。阿川の診断はどうか」

「多少長びくそうですけど、心配ないと思います。ただ登院するのは無理かもしれませんよ
「よせやい。そんなのないよ」

高望は、駄々っ子のように頬をふくらませた。

午後一番で点滴が始まった。

「ここまでやらないかんのかねえ。大袈裟だなあ」

うらめしそうな高望の顔といったらない。

三十二、三の若い医師が高望の右腕の静脈に注射針を刺そうと試みるが、血管が異常に硬くて通らなかった。

右腕から左腕に替えてみたが、やはりいうことをきかない。

「足から入れましょう」

右の足首から甲にかかる部分の血管は比較的硬直していないとみえ、やっと点滴用の針を受け入れた。

高望は、葡萄糖やら栄養剤の入り混じった黄色い液体を一時間ほどかけて体内に注入され、尿意を催したので、担当の看護婦に洗面所へ行くことを要求したが、罎瓶しびんを使用するように言われて、憤然とした。

「そんな重病人扱いしないでくれ。トイレぐらい自分で行けるよ」

「先生から絶対安静だと指示されています」

「大丈夫だ」

高望は、正子の肩を借りてベッドから脱け出し、浴衣の上にガウンを羽織った。

歩行では、正子の肩を借りなかった。高望はことさらそうしているのか胸を張って、肩を怒らせるようにして歩いているが、あとから従って行く正子の眼にはぐらぐら揺れてるようで、ひどく心もとなく映った。

洗面所の前で、正子は五分ほど待たされた。

「小水の出が悪いんだ。あんなに大量にぶち込まれたにしては……。腹が張って気分が悪いなあ」

高望は顔をしかめて報告した。

ベッドに横たわってから、しばらく眼を閉じて静かにしていたが、四時過ぎに空腹を訴えた。

「お腹が空いたなあ。ドーナツが食べたい。あんこの入ってないやつでいいから、食べさせてもらえないかねえ」

「先生に伺ってみましょう」

正子はナースセンターと掛け合ってみたが、阿川教授から食止の指示が出ているから承諾できないの一点張りだった。

正子は、あしたの検査に備えるためなのだろう、と思いながら食欲が出てきたことは元気が出